

# 笠岡高島史跡 探訪紀行

日本先史古代研究会会員 山崎泰二

日本先史古代研究会の発会以来の仲間に河田浩二氏と藪田徳蔵氏が、笠岡諸島の高島の住民として参加されている。当会の若狭会長の古い交流仲間で、後期高齢者の初老OB格である。この二人は高島生まれ高島育ちで、何より高島をこよなく愛され特に歴史に造詣が深い。元々は船員であったり、建築大工であったと伺っているが、それぞれ師を持たず独自の研究で今日がある。特に笠岡の高島は海上に浮かんでいる関係もあって、奇岩・磐座には亀や魚、鳥などの身近な自然のニックネームが付いている。当然のことではあるが陰陽の岩も点在する。中でも藪田徳蔵氏が熱を帯びた説明をなさるのが、自宅の裏山に存在する「子はらみ石」は単なる大きな岩では勿論ない。立派な神社(自作?)のご本尊である。

藪田御夫妻や数少ない共鳴者の河田氏などで参道＝ウオーク路・山路の階段を整備し。春・秋は草刈などに汗した後で、この岩を拝しながら一服。岩と対面しながらの思考の成果が大きな解説看板につながっている。太陽が昇り、陽が沈む。月が出て星が輝く。藪田さんの頭は少年の時代に遡ったかのような思考の世界を駆け巡っているのであろう。当然実年齢よりは頭が柔らかい。次々やりたいことが走馬灯のごとく廻っていて、まさに仙人とは彼等のことであろうか。

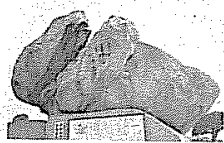
河田氏はお父さんの作市(故人)氏と二代に互って同じ趣味で、この高島で収集した遺物を「高島おきよ館」なる私設の博物館を開設し展示公開されている。その 1000 点にのぼる展示品の中には、縄文・弥生・古墳時代から有史時代まで幅広い。この島が記紀に出て来る神武天皇東征伝承の児島高島の有力地であり、皇国史観たけなわの先の大戦中の昭和 18・19 年に京大、東大の錚錚(そうそう)たる山内清男・梅原末治・小林行雄・坪井清足などの先生方が学術調査を行っている。それとは別に河田親子の貴重な収集は定点調査をしているようなもので、陶器の欠片(カケラ)が何年かして、一体となり接合する破片を発見された時の感動の笑みの語らいは藪田老師に劣らない。



左に掲載した新聞記事は平成 16 年 2 月 12 日に山陽新聞に大きく取り上げられた記事で実物はこの「高島おきよ館」に展示されている。詳しくは丸谷氏の研究資料を参照していただくとして、3000 年前のイラン製の青銅剣がこの高島で収集されたとすれば、その意味するところの意義は深い。この地で縄文弥生の遺物が出て、神武東征有力地であることと、瀬戸内海の交通の要所であり弥生末期には吉備地方では稲作文化が大きく開花し、その深源が稲作の発祥地インド～中国南部の江南地方に求めることができ。西域の文化が水耕稲作伝来と共に海人(あま・かいじん)の手によって持たされたとする、通説の証になると信じて。遙か彼方の江南地方から親潮に乗って九州島北部そして瀬戸内海を海人族が東進する姿が記紀の伝承に重なって、この高島に残照を残し、奇しくも河田さんのお父様が手にされた時には、感動で身震いがして、神掛かった状況のもと息子の浩二氏にも詳しい経緯が伝承されなかったと想定する。(自宅の押入れに大切に保管されていた)

下の記事はこの紀行文を構想中に朝日新聞に 2012.24.1.14 付けの“島時間臨時便”に「高島おきよ館と河田氏」それに藪田氏の「子はらみ石」が紹介されている。時を同じくして高島に移住して来た若い家族の特集記事が山陽

新聞で連載され、過疎の島に希望の光が差し込んで来ているようだ。



高島の小高い山の頂にある子  
はらみ石。東西8・3拵、南北  
5・5拵、高さ4・7拵。島民  
の間では懐妊と安産祈願の石と  
してあがめられている。

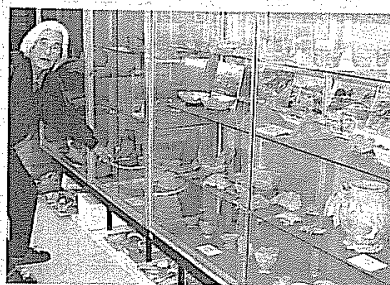
### 安産を祈願 高島

## 手作り博物館 高島

高島（笠岡市）の小高い丘に博物館「高島おきよ館」がある。島内から出土した原始から中世の石器類や土器、陶器など1千点以上を展示する。おきよは、島に滞在したといわれる神武天皇の船の名という。

島民有志が建築し、2005年にオープンした。

元船員、河田浩二さん(78)の自宅敷地からは戦前、大量の土器が出土した。京大と東大による発掘調査後も父の故作市さんが収集を続け、河田さんちはまった。「まるで島全体



が遺跡」と河田さん。

中世のころとみられる中国の青磁や白磁、紀元前1千年ごろのイランの青銅剣も見つかっている。

「高島が海上交通の主要な中継拠点地だったのでは」。想像は膨らむ。

しかし島は完全に高齢化している。二人の精魂込めた島の遺産も時と共に消滅する。せめてお二人がお元気な内は、雑草の蔓延る遊歩道は守らなくてはならない。昨年2度の訪問でも大変喜んで頂いた。春秋の除草作業を我々素人でもよければ、お伺い何かの役に立ちたいとの仲間の声も聞く。その節には皆様に案内します。美味しい空気と人情あふれる高島で、好きな歴史談義をしませんか。



左から3人目＝藪内さん 4人目＝河田さん